

1 教育・研究活動記録

2

3 「信頼される先生」の育成を目指す教育・保育職養成の自己省察：ティーチング・ポート
4 フォリオ・チャート作成を通じて

5 Self-Reflection on Training Educators and Childcare Professionals to Foster "Trusted
6 Teachers": Through the Development of a Teaching Portfolio Chart

7

8 高田由基

9 Yoshiki TAKADA

10

11 1) 愛知学泉大学家政学部こどもの生活学科

12 Faculty of Home Economics, Aichi Gakusen University

13 2) 筑波大学大学院人間総合科学学術院および鹿屋体育大学大学院体育学研究科・大学体育
14 スポーツ高度化共同専攻

15 Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education,
16 Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, and Graduate
17 School of Physical Education, National Institute of Sports and Fitness in Kanoya

18

19 連絡先 (E-mail) takada@gakusen.ac.jp

20

21

22

23

24

25

26

27

28

1

2

3 本稿は、筑波大学と鹿屋体育大学による博士課程・大学体育スポーツ高度化共同専攻の
4 必修科目として開講された 2026 年度「大学体育論」全 10 回のうち、7～10 回目の授業で
5 作成したティーチング・ポートフォリオ・チャート（栗田・吉田，2021）をもとに，筆者
6 の教育活動を整理し，省察するものである。本稿では，東京都市大学 FD 推進センター「テ
7 ィーチング・ポートフォリオ成果報告書」（2020）における都市大型ティーチング・ポー
8 トフォリオ（一般的にはティーチング・ステートメントに類型されるもの）における「はじ
9 めに，1. 責務，2. 理念，3. 方法，4. 成果，5. 目標，おわりに」の枠組みとおおよその文
10 字数に倣い，執筆する。以下，ティーチング・ポートフォリオを TP，ティーチング・ポー
11 トフォリオ・チャートを TP チャートと表記する。本稿の基となった TP チャートを図 1
12 に示す。

13 （図 1 を挿入 回転させて 1 ページ使用を希望）

14 はじめに

15 筆者は，愛知学泉大学家政学部こどもの生活学科に 2023 年 4 月に講師として着任し，4
16 年目を迎えている。本学科は保育士，幼稚園教諭，小学校教諭を目指す学生が在籍してお
17 り，本学には他にライフスタイル学科，管理栄養学科がある。筆者は小学校教員であった
18 経験や幼稚園教諭免許を有していることを生かし，保健体育分野を中心に小学校領域，保
19 育領域の科目を担当している。保育士，幼稚園教諭，小学校教諭を目指す学生に対し，特
20 に相手意識とコミュニケーション能力，そして専門知識を備えた「信頼される先生」の育
21 成を目指した教育活動を実践している。

22 また，100 km マラソン元日本代表としての競技歴や子どもから大人までの指導経験，東
23 京マラソンのペースランナーなど，長年ランニングの普及・啓発に携わってきた。学外活
24 動として，ランニング学会の副理事長を務めており（2026 年 4 月～），ランニングに関す
25 る研究と普及・啓発に尽力している。こうした背景のもと，博士課程では，学校体育にお
26 いて不人気の種目とされるランニング（持久走・長距離走）について，その授業の検討と
27 改善を提案する研究を計画している。本稿では，これまでの教育実践と博士課程での学び
28 を踏まえ，筆者の教育実践における理念・方法・成果・課題を整理し，今後の教育活動に

向けた省察を行う。

1. 責務

2026年度担当している授業科目は次の通りである。前期は、「卒業研究」(4年必修), 「教職保育特論 8」(4年選択, 担当 3 名), 「専門演習 A」(3年必修, 担当 2 名), 「体育科教育法」(3年資格必修), 「学校インターンシップ I」(2年選択, 担当 2 名), 「基礎演習 I」(1年必修, 担当 2 名), 「運動の科学」(ライフスタイル学科 1 年選択)に加え, 高大連携授業として系列高校 3 年生の「キャリアデザイン『健康スポーツ』」(選択, 担当 2 名)を担当している。後期は, 「卒業研究」(4年必修), 「専門演習 B」(3年必修, 担当 2 名), 「教職保育特論 6」(3年選択, 担当 3 名), 「保育内容(健康)の指導法 II」(2年資格必修), 「健康運動実技 B(ウォーキングとジョギング)」(管理栄養学科 2 年選択), 「基礎演習 II」(1年必修, 担当 2 名), 「体育実技」(ライフスタイル学科 1 年選択)を担当している。

校務分掌では, 3 年生担当(主任), 就職委員, SNS 担当, 小学校担当(実習, 教員採用試験対策等)をしている。

2. 理念

所属するこどもの生活学科の学生は, 保育士, 幼稚園教諭, 小学校教諭を目指しており, いずれも子どもをはじめとする他者との関わりやコミュニケーションが職務の中核を占める専門職である。これらを念頭に置き, 以下の理念に基づいて教育活動を行っている。

理念 1 : 相手意識と専門性を備えた「信頼される先生」の育成

学生は, 友人との励まし合いや教員からの言葉かけ, 実習先での子どもとの触れ合いを通じて, つまづきながらも立ち直り, 成長していく。これまで多くの学生がそうした過程を経て, 教育・保育の専門職を粘り強く志す姿を目の当たりにしてきた。こうした経験から, 「人は人の中で育つ」ものであり, 学びや主体性も人との関わりによってこそ深まると確信している。知識の習得は不可欠であるが, それだけでは現場で生きる実践力とはなり得ない。学生には, 常に相手意識と円滑なコミュニケーションを心掛け, 確かな専門知識を備えた「信頼される先生」になってほしいと考えている。本稿でいう「信頼される先生」とは, 子どもや保護者, 同僚に対して相手意識を持ち, 円滑にコミュニケーションを

1 とりながら，確かな専門知識に基づいて判断・行動できる教育・保育者を指す。

2 **理念 2：主体的に学び続ける専門職の基盤形成**

3 教育・保育，それぞれの専門職に必要な知識の習得は不可欠である。しかし，学生にと
4 って「やらされている」と感じるばかりの授業では，主体的な学びにはなり得ない。その
5 ため，学生にとって「学ぶ意義がある」と感じられる授業にしたいと考えている。具体的
6 には，「わかること，できることが楽しい」と学びの有用感が得られるような授業，「なぜ
7 だろう」「どう工夫するとよいだろう」と自ら問いを立て受動的な学びから能動的な学びへ
8 変化させられる授業，「実習で経験した子どものあの言動は，このことだったのか」と事後
9 的な理解や，理論と実践の往還がある授業を展開することで，主体的に学べる授業を実現
10 していきたいと考えている。

11

12 **3. 方法**

13 理念で示した 2 つの視点に基づき，学生自らが専門職としての能力を高められるように
14 したいと考えている。そのための方針と具体的な方法については，以下の通りである。

15 **方針 1：相手意識やコミュニケーションの重視**

16 相手意識やコミュニケーション能力は，教育・保育現場において子どもや保護者，同僚
17 と関わる基盤となる。そのため，時間や約束を守ることを通して相手意識と責任感を育ん
18 でいる。また，共同作業（ペアワーク・グループワーク）を積極的に取り入れ，相手を知
19 り，互いに支え合える関係づくりを促している。毎回異なるテーマでの自己紹介を行っ
20 たり，まずは相手の意見を受け止め，その上で自分の意見を伝えるようにしたりして相互理
21 解を図っている。「体育科教育法」，「保育内容（健康）の指導法Ⅱ」の授業では，作成した
22 学習指導案を学生同士で見合い，議論して，アップデートさせている。学生同士で意見や
23 悩みを共有し話し合うことは，主体的な学びを誘発するとともに，仲間意識や協調性を高
24 める効果を狙ったものである。

25 こうした課題や作業に関して，筆者は先送りせずにはすぐ取り組む姿勢を，学生の記憶に
26 残りやすい合言葉として「すぐやる課」と称し，日常的な声かけの中で伝えている。あえ
27 て平易な言葉を用いるのは，学生が日々の行動として意識しやすくするためである。すぐ
28 に取り組むことは，自身のためだけにとどまらず，相手に誠意が伝わり，信頼につながる
29 行動でもあるため，本人の相手意識と他者からの信頼の醸成につながり，その結果，良好

1 な人間関係が構築されると考えている。

2 また、相手意識を含めた教員自身の振る舞いは、明示的に教えなくても学生に伝わる教
3 育的メッセージとなる。反対に、疲れた様子や不機嫌な態度で学生に接することは、相手
4 に不快な思いをさせるばかりか、学生に好ましくない手本を示すことになりかねない。そ
5 のため、筆者自身がよい手本として元気な姿を示すことを心がけ、学生に安心感や信頼感
6 を与えられる存在でありたいと考えている。

7 **方針 2：主体的に学べる授業**

8 学生が「やらされている」と感じる授業では主体的な学びにはなり得ない。そのため、
9 学生自身が学ぶ意義を実感できる授業を目指し、以下のような方法を用いている。

10 授業計画はあるが、前回の学生の理解度や様子を踏まえて内容を柔軟に調整するとと
11 もに、学生の意見やコメントペーパーを共有・フィードバックすることで、学生にとって
12 授業を自分事として捉えられるようにしている。また、自身の専門分野への熱意から内
13 容を詰め込み過ぎてしまうと、情報過多となり学生の身にならないばかりか、思考を妨
14 げてしまうことがある。そのため、伝える内容を精選し、教えすぎず、発問によって引き
15 出すことを心がけている。さらに、共同作業を通じて能動的な学習を促し、思考や活動を
16 活性化させることで、授業への参加意識と主体性を高めている。加えて、授業内での対話
17 や思考に集中できる環境を整えるため、活動内容に応じてスマートフォンの使用を制限
18 し、学生同士の発言や共同作業に意識を向けられるようにしている。

19 **方針 3：適切な負荷と成長を実感できる授業**

20 授業の学びが今後の学修や実習、生活に役立つことを実感できるように工夫している。
21 また、失敗を恐れず安心して挑戦できる環境を作ることを重視し、以下のような方法を用
22 いている。

23 全 15 回の授業のうち、前半では比較的簡単な問いや課題を与え、スモールステップで
24 成功体験を積み、後半ではそれまでに学修したそれぞれの内容を結び付けた課題を課す
25 ことで、学修が生きている実感や成長を味わえるようにしている。こうした学びを支える
26 ために、共同作業や個別相談などを積極的に取り入れ、学生が一人で抱え込まずに課題に
27 向き合えるようにしている。

28 また、学生が見通しをもって安心して取り組めるよう、可視化とユニバーサルデザイン
29 を意識した授業づくりを行っている。具体的には、授業内容は必ずスライドや板書で示し、

1 後方の学生にも見やすいような文字の大きさ、色弱の学生にも見やすい配色に配慮してい
2 る。これは、小学校教員時代に難聴の児童を担当した経験がきっかけとなっている。その
3 他に、授業の流れや考える時間、作業時間などをあらかじめ伝え、大型タイマーを用いて
4 示すことで、学生が見通しをもって取り組めるようにしている。間違えてもよいという雰
5 囲気づくりを心がけ、まずは自分で考えることを促している。発問後には学生が考える時
6 間を確保し、思考を促すことで聞くだけの受動的な授業にならないようにしている。指名
7 する際には列単位で複数人に指名し、順に発言させることで、授業が自分事となり参加意
8 識が高まるとともに、発言者が一人ではないことから発言への抵抗感を和らげる効果があ
9 ると感じている。そしてその発言は、正答であれば成功体験になり、誤答であっても次に
10 生かせる学びとなる。学生には常々「失敗ではなく、全て学び」という言葉を伝え、ポジ
11 ティブな思考で取り組んでいくことを推奨している。

12

13 4. 成果

14 1) 授業評価アンケートの結果

15 2025 年度に単独で担当した 6 科目（運動の科学、体育科教育法、体育実技、こどもの健
16 康Ⅱ、健康運動実技 B、卒業研究）の学生による授業評価アンケートの結果について、10
17 項目（5 段階評価）の平均値を算出したところ、全体で 4.26 であった。中でも「教員は熱
18 意や意欲をもって授業に取り組んでくれたと思いますか」(4.40),「教員の話し方は聴き取
19 りやすかったと思いますか」(4.38),「教員は学生の理解度を確認しながら進めていました
20 か」(4.37) の 3 項目で比較的高い評価が得られた。これらは、方針 1, 方針 2 で示した姿
21 勢と対応するものであり、理念に基づく実践が学生に肯定的に受け止められていた可能性
22 を示唆している。

23 特に「健康運動実技 B（ウォーキングとジョギング）」では、全 10 項目で当該科目分類
24 の平均を上回り、前年度と比較しても多くの項目で向上した。自由記述には、「ウォーキン
25 グからジョギングへと段階を踏んで行っていく授業スタイルがとてもよく、自分の体力が
26 成長していくのが実感できました」という記述があり、方針 3 で示した授業設計が学生の
27 成長実感につながっていたことがうかがえる。

28 「こどもの健康Ⅱ」の自由記述では、学習指導案を学生同士で見合い、議論する活動に
29 ついて、「友達のものやアドバイスも貰えて勉強になりました」という記述があり、方針 1

で示した共同作業を通じた学びが生じていたことがうかがえる。また、「授業内容以外にも先生の授業の進め方や話し方などもとても参考になりました」という記述からは、教職・保育職を目指す学生にとって、授業そのものが将来の指導モデルとして受け止められていた可能性が示唆された。

2) 教員評価の結果

本学では毎年、学内の大学教員評価委員会による教員評価が行われており、2025年度のテーマは「基礎学力をふまえた教育活動および教育に関する研究活動」であった。担当科目における知識・技能、基礎的・汎用的読解力、思考力・判断力・表現力、主体的に学ぶ態度の4観点について、具体的な指導内容と成果を教員自身が報告し、同評価委員会がA～Dの4段階で評価を行う。筆者は「健康運動実技B（ウォーキングとジョギング）」を対象科目として報告し、4観点すべてで満点評価を得て、総合評価はAとなった（2024年度：B，2023年度：Cであった）。この結果は、学生の実態を意識した授業設計・指導方法の工夫が、学内の第三者評価において一定の評価を得たものと考えられる。

3) 筆者の省察

筆者の省察として、授業内外で学生が「高田先生のようにポジティブに考えます」「すぐやる課ですから！」「全て学びですね」という発言を聞く機会が増えたと感じている。これらは、筆者の理念が学生に共有され始めている可能性を示すものと考えられる。ただし、この変化を客観的な成果として判断するためには、今後、学生のコメントや授業記録を継続的に蓄積して検討する必要がある。

5. 目標

これまで述べてきた理念・方法・成果を踏まえ、今後は、学生一人ひとりへの教育実践の充実から、体育・スポーツという分野全体への貢献、さらには自身が専門とするランニングを通じた社会的課題の解決まで、視野を段階的に広げながら取り組んでいきたい。

1) 専門職養成の目標

教育・保育現場の労働環境に関する課題が指摘される現状においても、その職務の価値や魅力を伝え、誇りと自信を持って専門職を目指す学生を育成する。

2) 体育・スポーツ教育の目標

体育・スポーツの専門家として、運動・スポーツの価値を学生に提示し、生涯にわたって豊かなスポーツライフを享受できる人材を育成する。

3) 研究・社会貢献の目標

専門であるランニングの魅力を発信し、学校体育における持久走・長距離走に対する負のイメージを払拭するため、ランニング授業の改善に資する研究と実践を進める。

これら3つの目標は、専門職を目指す目の前の学生との関わりから、体育・スポーツ教育、そして社会的な課題解決へと段階的につながるものであり、相互に関連している。今後も日々の教育実践を丁寧に積み重ねながら、これらの実現に取り組んでいきたい。

おわりに

今回、TPチャートの作成の機会を通じて、筆者が日々の授業や教育活動で重視してきた考え方が、教育・保育職を目指す学生に対する専門職養成の理念とどのように結びつけられているかを確認することができた。また、小学校教員やランニング指導の経験が現在の授業方法や学生への関わり方に反映されていることも可視化することができた。今後は、学生のコメントや授業評価、授業記録を継続的に蓄積し、理念と方法と学生の学びの関係をより丁寧に検討していきたい。

本稿を執筆するにあたり複数の大学教員のTPを参考にし、多様な実践に触れることができ、新たな学びとなった(狩野, 2026; 向後, 2026; 松永, 2026; 鈴木, 2026; 木内, 2021, 2024)。本稿も今後の大学体育教育の発展に資する一事例になれば幸いである。

謝辞

本稿およびTPチャートの作成にあたり、丁寧にご指導くださいました筑波大学・木内敦詞教授に心より感謝申し上げます。また、TPチャート作成にあたり、ともに共同作業を行い、適切かつ建設的なご意見をくださいました筑波大学人間総合科学学術院および鹿屋体育大学大学院体育学研究科の大学体育スポーツ高度化共同専攻の学生の皆さまに心より御礼申し上げます。

文献

狩野莉奈, 自己受容の高まりを導く大学体育体操授業: ありのままを受け入れられる関係性の構築をねらいとして, 大学体育研究, 48, 15-20, 2026.

向後佑香, すべての学生が大学体育に参加できる学びの場を目指して一聴覚障害学生を対

- 1 象とした大学体育の教育実践記録一，大学体育研究，48，37-42，2026.
- 2 木内敦詞，ティーチング・ポートフォリオ・チャートの大学体育への適用：教職歴 30 年の
- 3 大学教員の事例報告，大学体育研究，43，137-144，2021.
- 4 木内敦詞，誰もが全力で接戦を楽しむ大学体育ソフトボール授業の教育実践記録，大学体
- 5 育研究，46，1-16，2024.
- 6 栗田佳代子・吉田壘，リフレクションを可視化するティーチング・ポートフォリオ・チャ
- 7 ート作成講座，医学書院，2021.
- 8 松永武人，省察と対話を基盤とした教育実践の構築，大学体育研究，48，21-27，2026.
- 9 鈴木寛康，共創的学習力と主体的自己形成力を育む保育者養成短期大学における体育教育
- 10 の実践記録，大学体育研究，48，29-36，2026.
- 11 東京都市大学 FD 推進センター，2020 年度ティーチング・ポートフォリオ成果報告書，
- 12 [https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.](https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf)
- 13 pdf，2026.8.24.

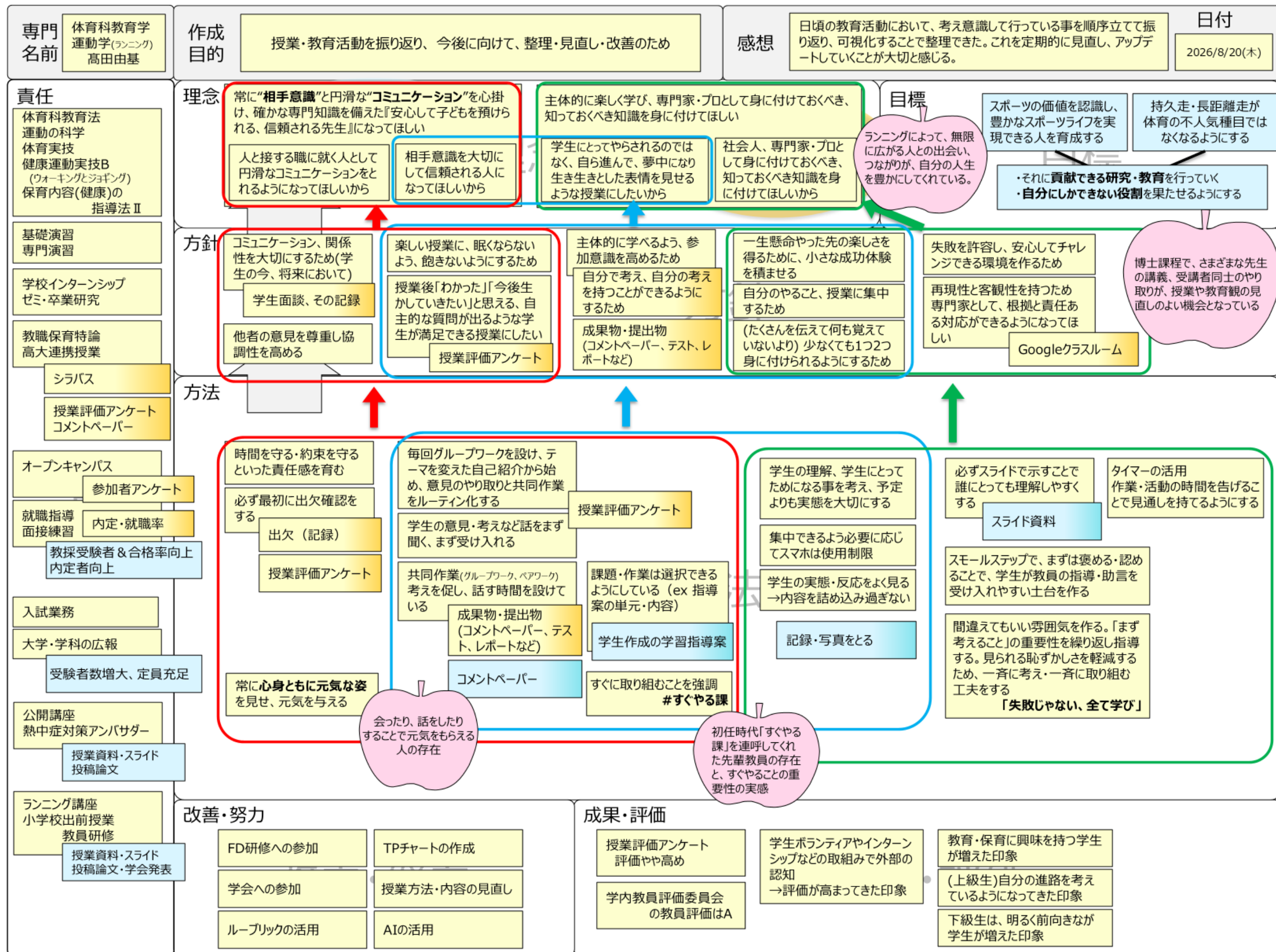


図1 TPチャート